日本における自尊心の発達の軌跡

—Rosenberg の自尊心尺度得点の青年期から老年期における年齢差の検討—

○荻原祐二¹ 楠見孝²

(東京理科大学¹ 京都大学大学院²)

Key words: self-esteem, age difference, developmental trajectory

目 的

自尊心は、生涯を通して常に一定ではなく、発達と共に変化する。これまでアメリカを中心に多くの研究が行われ、自尊心は児童期に高く、青年期に低下し、成人期に上昇し続け、50代・60代頃にピークを迎えてその後低下することが示されている (e.g., Orth & Robins, 2014)。日本においても、自尊心の一要素である自己好意が、同様の変化を示すことが報告されている (Ogihara, 2016; 荻原, 2018)。

しかし、日本における自尊心の年齢差を検討した先行研究には2つの限界点があった。第1に、先行研究は自尊心の一要素である自己好意 (項目例:「自分のことが好きである」) を用いて検討しており、自尊心を包括的に検討していなかった。自尊心は、自己好意と自己有能感から構成される (e.g., Tafarodi & Swann, 1995) ため、自己好意から自尊心の発達の軌跡が強く予測されるが、自己好意と自己有能感を同時に含んだ包括的な自尊心を検討することが望ましい。

第2に、先行研究は70歳以上の自尊心については検討できていなかった。日本では、69歳まで自尊心が低下しない可能性が指摘されているが、自尊心の低下が70歳以降に見られるかもしれない。また、自尊心の低下そのものが、日本では見られない可能性もある。自尊心の高低が文化によって異なることは一貫して報告されてきた (e.g., Schmitt & Allik, 2005) が、発達の軌跡のパターンが異なることは報告されておらず、理論的・社会的意義を持つ。よって、日本における自尊心の発達の軌跡を包括的に明らかにするためには、70歳以上の高齢者の自尊心についても検討することが必要である。

したがって本研究では、70歳以上も含めたより幅広いサンプルを対象に、自己好意と自己有能感を両方含めた包括的な自尊心の年齢差について検討した。

方 法

■調査: 多様で大規模なサンプルを対象に、2009年から2018年に日本で行われた独立した6つのウェブ調査を分析した。

■参加者: 16歳から88歳までの6,113名 (男性2,996名、女性3,117名) がウェブ上で調査に回答した。性別と年代ごとのサンプルサイズを表1に示した。

表1 性別と年代ごとのサンプルサイズ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合計
男性	101	574	462	682	516	504	133	24	2,996
女性	110	587	508	700	540	527	120	25	3,117
合計	211	1,161	970	1,382	1,056	1,031	253	49	6,113

■項目: Rosenberg (1965) の自尊心尺度 (10項目; $\alpha > .86$) を用いた。使用した日本語版等の詳細は大会で報告する。

■分析: まず調査ごとに自尊心得点を被説明変数とした階層的重回帰分析を行った。軌跡が直線か二次及び三次の曲線かを明らかにするため、Step1では年齢のみを説明変数として、Step2では年齢の2乗、Step3では年齢の3乗を加えた (各変数は中心化した)。その後、調査によって変化のパターンに差が見られないことを確認した。よって、自尊心得点を各調査内で標準化し、6つの調査を合わせた分析を行った。これらは、各年齢のサンプルサイズで重みづけを行い分析した。

結 果

階層的重回帰分析の結果、男女で結果は一貫していた。Step1が有意 ($p < .001$) で、Step2を加えたことによる分散説明率の増加分も有意であった ($\Delta R^2 > .01$, $p < .05$)。しかし、Step3を加えたことによる分散説明率の増加は有意ではなかった ($\Delta R^2 < .02$, $p > .08$)。得られた回帰式を用いて、自尊心の年齢差を図1に示した。16歳の青年から88歳の高齢者まで、自尊心は上昇し続けていた。

図1 日本における自尊心の年齢差 (上が男性、下が女性)。

考 察

Rosenberg (1965) の自尊心尺度を用いて、16歳の青年から88歳の高齢者までの自尊心の年齢差を検討した。その結果、自尊心は青年期で低く、成人期から高齢期まで増加し続けていた。青年期から中年期までの変化は欧米の先行研究 (e.g., Orth & Robins, 2014) と一貫していたが、先行研究とは異なり、50歳以降でも自尊心は低下していなかった。よって、自尊心の発達の軌跡が文化によって異なる可能性が示唆された。

本研究は横断調査に基づくため、年齢差にはコホート差も含まれている。年齢差とコホート差を切り分け可能な縦断調査の分析が望まれる。また、80代のサンプルサイズが小さいため、より多くのデータを収集し、知見の妥当性を確認する必要がある。欧米における中年期以降の自尊心の低下の一因として、自分の誤りや限界を認めるなど、自己に対する謙虚な見方を取るようになることが挙げられている。一方日本では、欧米と比べて、人々は高齢期だけに限らず自己に対するより謙虚な態度を表明する (e.g., Heine et al., 1999)。そのため、自尊心の低下が見られなかった可能性がある。文化差を生み出し得る要因についても今後検討を行う必要がある。

(Yuji OGIHARA, Takashi KUSUMI)